

知と疑と信

——アウグスティヌスの『アカデミア派論駁』
における信憑的なもの *probabile* について——

片 柳 栄 一

アウグスティヌスの『アカデミア派論駁』については、中世哲学会でも1986年に岡部由紀子氏¹⁾、昨年神崎繁氏²⁾の注目すべき発表があった。本論文もそれをふまえたものである。これまでの研究は、大抵の場合この『論駁』においてアウグスティヌスは、いかなる疑いもいれない絶対確実な知を見だし、これをアカデミア派の懐疑に対置したと考えてきた。岡部、神崎氏の発表はこうした定説を批判した点に重要な意味があるように思われる。筆者もアウグスティヌスの意図は別様であったと考える。アウグスティヌスは第一書簡の冒頭でこの『論駁』について次のように述べている。「私は、アカデミア派の人々が、通常信じられているのとははるかに異なった考えを持っていたと思わなかったなら、戯れにせよ決して彼らを敢えて批判などしなかったでしょう。かほどの人々の権威が私を動かさなかったことがいつあったでしょう。だから私は、彼らを攻撃するというより、出来る限りかれらを模倣したのです。攻撃するなどまったく私にはできるものではありません」。ここにアウグスティヌスの一種の謙遜が表されているのは事実であるが、彼らを模倣 *imitari* したと言われているのは、どのようなことなのであろうか。この言葉はこれまであまり真剣には考えられてこなかったように思われる。しかしこの言葉はまじめに受けとめられるべきであり、この『論駁』でアウグスティヌスがどの点でアカデミア派の人々を模倣したのかを探りつつ、この書におけるアウグスティヌスの意図が何であったのかをもう一度考えてみたい。

1

『論駁』は、第二巻の22節のところから、それまでの少年たちを訓練するための議論を終えて、アリピウスとのきわめて真剣な息詰まるような討論に移っていく。そしてその論戦におけるアウグスティヌスの立場（そしてそれはこの『論駁』におけるアウグスティヌスの基本的立場でもある）を表明している注目すべき一文が23節に置かれている。これは自らの立場とアカデミア派の立場の相違（わずかな相違であるとアウグスティヌスは言うが）を述べたものであり、筆者の考えるところでは、キケロの『アカデミカ』の一節に対応するものであると思われるので³⁾、対照的にあげて置く。

Inter quos et me modo interim nihil distat, nisi quod illis probabile visum est, non posse inveniri veritatem; mihi autem inveniri posse probabile est. Nam ignoratio veri, aut mihi, si illi fingeant, pecuriaris, aut certe utrisque communis.

(Augustinus. *Contra Academicos*, II, 9, 24)

「現在のところ、彼らと私の間には、次の様な違いしかない、つまり彼らには、真理が見いだされないということが信憑的なように見えるのに対して、私には、真理が見いだされうるというのが信憑的なのである。さて真理を知らない

Nec inter nos et eos, qui se scire arbitrantur, quicquam interest, nisi quod illi non dubitant quin ea vera sint, quae defendunt, nos probabilia multa habemus. quae sequi facile, adfirmare vix possumus. Hoc autem liberiores et solutiores sumus, quod integra nobis est iudicandi potestas, nec ut omnia, quae praescripta a quibusdam et quasi imperata sint, defendamus necessitate ulla cogimur.

(Cicero, *Academicorum priorum* II, 8)

「我々と、自分が知っていると思っている人々との間には次の様な違いしかない、つまり彼らは自ら擁護するものが真理であると疑わないのに対して、我々は従うのに容易であるが、肯定するに難い多くの信憑的なことを持っている」と

ということは、もし彼らが装って
いるなら、私に固有なことであり、
そうでなければ双方に共通するも
のであろう」。

いうことである。判断能力は我々
には十全であり、或る人々に訓令
され、いわば命令された全てを擁
護するように、何らかの必然性に
よって強いられることがないので
あるから、我々のほうがより自由
で、とらわれないのである」。

キケロは『アカデミカ』第一版第二巻でルクルスにアカデミア派批判をさせ、さらにそれに答えて自らがアカデミア派擁護の論陣を張るが、ルクルスの弁論に先立ち、自らの立場を要約している。それが引用した文である。自らは知っていると思っている人々とは、勿論ストア派の人々のことである。アカデミア派の人々は、みずからの考えていることを真なることとはみなさず、信憑的なこと *probabile* とみなす。それによって彼らは一つの独断的な考えに捕らわれることなく、より自由な判断能力を保持しうるのであり、そのようにしていつも自由で開かれた生き方をなしうると考える。このキケロの文章は、アカデミア派の思想の一つの核心をついていると言って良いであろう(行為の為にこの言葉を導入したカルネアデスの意図が何処にあったかは、別として)。マニ教の独断的な神話的教義の虜となり、そこからなんとか逃れようとしていたアウグスティヌスにとって、アカデミア派の持っていた意味もこの自由なとらわれなさにあったことは容易に推察される。キケロは、自ら知っていると思いなしている人々ということでストア派の人々を考えているのであるが、これを読んだと思われるアウグスティヌスはここにマニ教の人々、およびそこで青春の大部分の時期を過ごした己自身を重ねていたことと思われる。アウグスティヌスがアカデミア派の懐疑主義に接近していったのは、けっして真理探求に絶望したからではなく、アカデミア派のうちに自由なる探求の可能性を望み見たからといえるように思う⁴⁾。(dedocere という言葉がアウグスティヌスにとってのアカデミア派の意味

を最も適切に表しているように思える (Aug. C.A., III, 17, 38)。ストア派の立場と自らのアカデミア派の立場を簡潔に対照させたキケロにならって、アウグスティヌスはこの『論駁』の中でアカデミア派の立場と自分の立場とを、キケロが用いた *probabile* をやはり使って描き出す。アウグスティヌスはアカデミア派も自分も共に *probabile* というところに立つという点で或る共通性を見る。そしてこのアウグスティヌスの言明はレトリックとしてではなく、真剣なものとして受けとめられるべきであるように思える⁹⁾。先にも述べたように、『論駁』におけるアウグスティヌスの立場は、決して絶対確実な知を所有するどころからアカデミア派を批判するというものではなく、アカデミア派が主張する *probabile* と同じところに立ち、そこで何が一層理にかなっているかを見きわめようとするのである。同じ *probabile* に立ちながら違いは何処にあるかといえ、アカデミア派には真理は見いだされえないと思われるが、アウグスティヌスには見いだされうると思われるという点である。この可能性の蓋然性をめぐって討論が展開されるのであるが、その点は後にみるとして、アウグスティヌスが次に述べていることは、何げないようでありながら、アウグスティヌスのアカデミア派批判にとって決定的に重要であるように思われる。彼は、自分は真理に関して無知であると率直に認める。つまり自らの立場を *probabile* としたということは、自らは、真理を未だ知らないと認めることだと考える。すると同じことがアカデミア派にも問題となる。アウグスティヌスはアカデミア派には隠された考えがあると思っているから、留保をつけて、もし彼らが装っているなら、無知は自分だけのことになるが、もしこの *probabile* の主張を彼らの真剣な主張と考えるなら、真理についての無知は両者に共通のこととなると言う。 *probabile* を主張する自らもそしてアカデミア派もその立つところは、真理を知る知者の立場ではなく、真理についての無知の薄暗がりであるということである。キケロがいかにアカデミア派の立場を自由な開かれた探求精神と讃えようとも、あくまでこの立場は、真理についての無知者の立場であり、知者ではなく、愚者の立場であると言いたいようである。キケロも

自分は知者でないことを公言している。「しかし私は、いかなる偽りをもけっして是認しない者ではなく、絶対に同意しない者、何も臆断しない者などではない。しかし我々は知者について論究しているのである。私自身はといえば、確かに大いなる臆断者である。一私は知者ではないのだから、……しかし先にも述べたように私についてではなく、知者について論究されているのである」(Cicero. *Aca.* II, 66)。キケロは自分は知者ではなく、大いなる臆断者であるとしながら、ここでの議論は自らの現状についてではなく、あるべき理想としての知者の在り方であると言う。アウグスティヌスはキケロのこの言葉をとらえて問題にし、『論駁』のなかで引用している。「もし君が、知者そのものが見いだされ得ないというなら、アカデミア派の人々とはなく、君が誰であれ、君と別の討論で論じよう。というのもアカデミア派の人々はこれを議論するとき、知者について議論しているのだから。キケロは自らを大いなる臆断者だとしながら、自分は知者について論究しているのだと声を大にしてのべている」(Aug. *C. A.* III. 14, 32)。アウグスティヌスはキケロのこの言葉を拠り所として、アカデミア派をめぐる議論は、アカデミア派が述べる知者の問題だととらえる。我々はともすると、この『論駁』の争点は、アウグスティヌスがアカデミア派に対して確実な知を証示できるかどうかにあるかのように考えがちであるが、アウグスティヌス自身は別様に考えている。アウグスティヌスは、アカデミア派との論争は、知の獲得の可能性をめぐるものというより、知者の規定をめぐるものと言う。確実な知による懐疑の克服という近代的な関心に慣れている我々はこのアウグスティヌスの問題設定にいささか戸惑わざるをえないのであるが、これを無視することは、テキストをねじ曲げることになる。このことを確認するために同様の考えを述べている箇所を引用しておく。「それではついで、知者が見いだしうるかどうか問おう。というのももし見いだしうるなら、その知者は知恵を知ることにも可能なのであり、我々の間の全ての問いは解決したのである。しかしもし、見いだし得ないと君が言うなら、問題は、知者は何かを知っているかではなく、ひとは知者たりうるかということである。そうであ

るなら、アカデミア派の人々からは身を辞して、君とともにこの問題をできる限り精密に、注意深く考究しなければならない (III. 4, 10)」。アウグスティヌスは、ストア派に対するアカデミア派の批判の出発点にこの「知者」の問題があるとみている。良く知られているように、アカデミア派は、ストア派のゼノンの真理把握の説、つまり偽りであるものしるしを持たないそのようなしるしによって真理は把握されるという考えを受け入れ、またやはりストア派の主張、知者は臆断しないということも容認し、しかも第一の考えにある偽りと共通でないしるしなど見いだされ得ないことを明らかにして、知が得られない以上、知者のなすべきことは、臆断しないように同意を控えるべきであると主張する (Aug. C. A. II. 5, 11)。これはストア派の用語を用いて、あなたの前提からしてもそのようになりますよと主張するアルケシラスの対人 *ad hominem* 論法であることが、今日多くの研究者⁹⁾によって明らかにされている。しかしキケロはアカデミア派自身の知者論と受け取っており、アウグスティヌスはそれを受け、真理を知らないなかで、なお知者たりうるとし、その知者の在り方を論ずるアカデミア派としてのキケロの議論を問題とする。キケロは自分を臆断者としている。自分は誤り、迷う者であることを認めながら、彼は、一つの理想として、臆断しないアカデミア派的な知者の在り方を描く。アウグスティヌスは、このキケロの臆断者であることの告白を巧妙に真似、自らを愚か者としながら、キケロの立場の矛盾を衝いていく。キケロは、知は獲得されえないとしながら、そのような知のない、その意味で無知ではあるが、決して臆断はしない知者がありうるとする。しかもそれは現在の自分ではなく、一つの理想としての知者である。アウグスティヌスが批判するのは、臆断しないよう同意を差し控え、自らの主張すら *probabile* とする徹底的な在り方が、即知者の在り方とする意見である。アウグスティヌスは、ここに臆断を避けようとするアカデミア派(キケロ)の貴重な努力を認める。しかし *probabile* にとどまるかぎり、どこまでも無知者であることにかわりないとする。どれほど誠実に、捕らわれず、自由に探求しようと、知恵を知らないかぎり、知者ではなく、愚か者であり、無知

を自覚したからと言って、知者になるわけではなく、ただますます愚かな自分が見えてくるにすぎない。この在り方を知者の在り方とするキケロをアウグスティヌスは厳しく批判しているようである。

2

アウグスティヌスの批判はさらに *probabile* の内容に関わってくる。アウグスティヌスは自らとアカデミア派を同じ *probabile* の立場としながら、相違は何を *probabile* と見るかだとする。アウグスティヌスは『論駁』第三巻でアリピウスと新たな論戦に入るにあたり、第三巻 III, 5 節でもういちど先に挙げたアウグスティヌスとアカデミア派との相違を述べる。「私とアカデミア派との相違は、彼らにとっては真理が把握されないというのが信憑的であると思われるのに対して、私には確かに未だ真理はみいだされていないが、知者によって見いだされうるというのが信憑的であるということである」。先のキケロの言をもじるようにして、私は愚かであるから未だ真理を見いだしてはいないが、知者という理想の人によっては見いだしうると思われると言う。そして理想の人としての知者を問題にする場合に、この知者が知恵をもたず、真理を所有していないというのはおかしいことではないか、と問うていく。知者とは、真理が見いだされることを体現する者である。アリピウスも知を持たない知者という考えのおかしさにきづいているが、知者が知恵を持つと認めることは、懐疑主義の放棄につながるので、様々な逃げをうつつが、アウグスティヌスの厳しい追求をうけて、知者は知恵を知ると私に思えると言わざるをえなくなる (III. 4, 9)。アウグスティヌスが何故このように執拗に、知者は何事かを知ると自分に思えるのアリピウス（アカデミア派の代弁者）に言わせようとするのか、読む者はいささか怪訝な気持ちにさせられる。単なる分析命題の確認のようなことに何故それほど執着するのかと言いたくなる。しかしアウグスティヌスはここにアカデミア派批判の核心があると考えているようである。アリピウスとの厳しい討論を終えるにあたってアウグスティヌスは結論をまとめる。「だからいまや我々は

意見の一致をみている。つまり私にとっても、また彼らにとっても、知者は知恵を知っていると思われる。しかしながら彼らは同意を差し控えるように薦める。というのも、単にそう見えるだけで、知ることは決してないからと彼らは言う。まるで私が、自分は知っていると言っているかのようだ。私にとってもそれがそう見えるということだと言おう。というのも私は愚かであり、彼らも、もし知恵を知らないなら、同様に愚かなのである。しかし我我は或ることを肯定しなければならない、つまり真理をである。……真理には同意しなければならない。しかし誰がその真理を示してくれるのか、と彼らは問う。その点では私は彼らと争おうとは思わない。知者が何も知らないということが信憑的ではないということで私には十分なのである」(III.5,12)。両者とも *probabile, videtur* という患者の立場にたちながら、哲学的知としての真理が見いだされうと思われるとするのと見いだされえないと思われるとするのでは、どこが異なるのであろうか。それは、無知の薄暗がりの中に立ってなお、知への関わり、知への方向性を持つとうとするかどうかの違いであるように思われる。アウグスティヌスは自らの場を、知からみて無知の深き淵としてとらえ、知を自らの目指すべき遙かな目標とする。 *inveniri posse* が信憑的であるとみなすということは、そのような知への関わりが許されることであり、知へ向かう可能性があるということである。知は見いだされ得ないのが信憑的であるとするとは、知への関わりを放棄することであり、自らを知へ方向づけようとしなないことであり、知の探求を断念することである。臆断しない、自由な懐疑精神が、探求にとってどれほどのぞましい前提条件であっても、探求にとって決定的なこと、精神を知へ方向づけることがアカデミア派(キケロ)には欠けている。アウグスティヌスにとって真理としての知は、無ければ無いで済ましうものではない。知を持たない者は無知の現状に抗して、いわばそのような己を越えて知を求めていくべきであり、知はそれなしには生そのものが成り立たない絶対的な何ものかなのである。ここにはプラトニスト、アウグスティヌスの知に対する高い要求、絶対的要求、あるいは、救済的とも言える要求があるように思われる。

古代の懐疑主義は、信なき生を求めたといわれるが⁷⁾、アウグスティヌスが非難するのは、そのことではなく（少なくともこの『論駁』においては）、いかにとらわれのないものであれ、知を欠いた生をあたかも理想の生であるかのように語るアカデミア派の主張であったように思える。この懐疑主義は、独断のない自由なとらわれなさを、人間が到達すべき目標として掲げる⁸⁾。

問題は、知はなくとも、臆断がなければ、ひとは、幸福になりうる、とするアカデミア派の立場と、どれほど臆断を取り除いても、知なしには、人は幸福にはなりえないとするアウグスティヌスの立場の相違であると思う。懐疑主義を標ぼうするケケロの「自然本性の考察と観照こそ魂と才質のいわば食料 (pabulum) であり、自然的なものである」(Aca. II, 127) という言葉をもじりながら、アウグスティヌスは、書簡Ⅰで、アカデミア派の知への諦め(自分の体験と重ねながら)を、「魂の食料 (pabulum animi) としての真理への絶望」として特徴づけているが、ここに両者の相違がよく現れているように思われる。

アリピウスとの討論の焦点は、今述べたように、「知者」をめぐるものであったが、それに続くアウグスティヌスのアカデミア派批判の演説も、決して一般的に人は確実な知を持つか、或いはアウグスティヌス自身持っているか、ということではなく、ケケロにならい、自分ではなく、知者は知を持ち得るか、知者は同意すべきでないかという問題である。そして繰り返しアウグスティヌスは、知者が知を持つということが、わたしにとって *probabile* であれば、十分だとしている。絶対確実な真理を示してくれという要望(挑発といっても良いかもしれない)には応じない。いささか空疎な選言命題の真理性を挙げたあとで、アウグスティヌスは次のように述べる。「これらはいかなる偽りとも似たものが見いだされないのであるから、これらのことを私が知らないことを確信させることがあなたにできないとするなら、知者は哲学において真であることを知っているとして正当にもわたしに思えると結論することを私は躊躇するであろうか。それについてかくも多くの真なることを私も知っているというのに」(III. 12, 27)。アウグスティヌスは、

自らが提出した真なる命題を懐疑を克服する絶対確実な知として示しているのではなく、知者でない私ですら何らかの意味で真といえる知を持っているとすれば、知者が知を持つということは *probabile* であると言っているのである。この知は *probabile* を支える役割でしかない。同意の差し控えに異論を述べる場合も同様の論法である。「知者が何等かのことを知っているということがすでに信憑的なこと *probabile* であるなら、それ以上に私が望むことはない。というのも知者は同意を差し控えねばならないというのが信憑的と見えるのは、何も把握されえないというのが信憑的であるという以外の理由からではないからである」(III. 14, 30)。この『論駁』に関する研究は、古くは W. Thimme⁹⁾ から、最近の Ch. Kirwan¹⁰⁾、Th. Bucher¹¹⁾ に至るまで、アウグスティヌスの提起した「知」が、内容のない空疎なもので到底懐疑論を克服できるものではないとしているが、こうした批判が、アウグスティヌスの今述べた重層的な、戦略的態度を考慮したうえでなされたものか、きわめて疑わしい。アウグスティヌスは知の確実性を武器にアカデミア派と対峙しているのではない(ましてや確実な知を抛り所として、新たな信仰の生を始めているのではない。その意味で、カッシキアムでアウグスティヌスは懐疑を克服したかということは、近代的偏見にもとづく Sheinproblem である)。

3

アウグスティヌスの『アカデミア派論駁』において *probabile* という概念が決定的に重要な意味を持っていることをこれまで見てきたのであるが、この概念は、アカデミア派の歴史的展開のなかでも重要な意味を持っていた。あるいはキケロが『アカデミカ』のなかでこの概念に極めて重要な意味を与えていたが故に、アウグスティヌスはこの概念に焦点をあてて問題にしたともいえよう。キケロはカルネアデスの弟子のクリトマクスがものした「同意の差し控え」という書物から次のようなカルネアデスの考えを取りだし、述べる。「感覚的現れの二つの種類をカルネアデスは好んで区別した。その

一つにおいては、次のような区別がなされる、つまり或る現れは知覚され *percipi* うるが、他の現れは知覚されえない。もう一つの種類においては、或る現れは信憑的であり、他の現れは、信憑的ではない。だから感覚に反対して、また明証性に反対して言われることは、前者の区別に属する。後者に反対して何か言う必要はない。こうしてカルネアデスの考えによれば、知覚がそこから生ずるような感覚の現れはなんら存在しないが、是認が生ずるような現れは多く存在するのである。確かに信憑的なものが何もないということは自然に反することであり、そうでなければ、ルクルス、君がさきに言及したあらゆる生の転倒が生ずるであろう。だから感覚にとって信憑的である多くのものが存在する。ただそうしたもののうちの一つとして、誤りがそれとは明確に区別されるような類のものはないと認めておこう。このように知者は、信憑的なものの類に出会う場合、もしその信憑性に反するようなものが何も示されないなら、これを用いるのであり、こうして生の全ての理路が整えられるのである。実際あなたがたによって知者として描かれた人も、把握されず、知覚されず、同意されはしないがしかし真に似た多くの信憑的なものに従うのである。これを信憑的としないなら、あらゆる生は奪い去られよう」(Cic. Acad. II, 99)。ここにキケロによって描かれたカルネアデスは、明証的な知覚の存在は否定したが、実際生活を営むうえでは信憑的なものを指針の如く考えていたことになる。ここからカルネアデスは、知者も時には、臆見を抱くと考えたと言われるようになる。キケロも述べている。「知者が何らかのものに同意するなら、いつか臆見を抱くことになろう。しかし知者はけっして臆見を抱かない。だから何ものにも同意しない。この結論をアルケシラスは肯定した。というもかれは大前提も小前提も認めたのである。カルネアデスは、時に同意することもあるということの小前提として用いることもあった。だから臆見するという結論も生じたのである」(Cic. Acad. II, 67)。エポケーを厳しく求めるアルケシラスに対して、時に知者が同意を容認して、臆見することを認め、信憑的なものに従うことを許すように見えるカルネアデスは懐疑の刃を鈍くしているように見える。キケロはこのように

把握したカルネアデスの信憑的なものについての考えを自らの懐疑論の中心に据えている。ところがこの同じキケロが、いささか奇妙なことに、カルネアデスがこの考えを述べたのは、みづからの説を述べたというより、議論のためであったと判断しているのである。「というのも何も知覚しないとしながら、なお臆見するという立場もありうるのである。カルネアデスはこれを肯定したと言われる。私はというと、フィロやメトロドロスよりもクリトマクスを信じて、カルネアデスはそれを肯定したというより、議論したのだと考える」(Cic. Acad. II, 78)。このキケロの言葉から、すでにアカデミア派の内部で、カルネアデスの言説の真意について意見の相違があったことが知られる。クリトマクス自身、「カルネアデスが何を肯定したのか、結局理解できなかった」(Cic. Acad. II, 139)と認めているように(この表現自身自らの無能力よりもカルネアデスの思想の戦略的弁証性を暗示しているように思えるが)カルネアデスの考えは一筋縄ではいかない謎を秘めており、弟子たちの間でも理解の相違をうみだしていたのである。近代の研究者の間でも、Hirzel¹²⁾や Brochard¹³⁾は、フィロやメトロドロスのほうがより正しくカルネアデスを理解した、つまりカルネアデスは、自らの考えとして信憑的なものを主張したのだと考え、多くの支持を得てきたが、P. Couissinはその画期的論文「新アカデミア派のストア主義」のなかで、カルネアデスが臆見を認めているのは、自らの説としてではなく、ストア派に対する対人論法としてであるとした¹⁴⁾。つまりアルケンラスが知者は明証なるものみに同意すべきであるというストア派の主張を逆手にとって、真理の基準となるものがないとすれば、残される結論は、同意の差し控えであるとしたのに対して、カルネアデスは、もう一つの可能性として、知者は必ずしも明証的でないものにも同意すべきであるという仮説を展開したのだと Couissinは考える。つまりアルケンラスのエポケーの薦めに対してストア派は、同意なしには行為はありえないのだから、同意の差し控えからは行為の不可能性が生じるとの厳しい批判(アウグスティヌスもこの批判を「もっとも威力ある矢 *validissimum telum*」(C. A. III, xv 33)と述べている)をなしたのに対して

カルネアデスはそれに応えるために、真理の基準が見いだされないうちで、エポケーをせず、同意するならどうなるかをストア派の求めに応じて展開し、その結論として知者が臆見を抱くというストア派が受け入れがたい命題を導き、エポケーするか、臆見を抱くかのディレンマにストア派を追い込もうとしたとするのである。さらに Couissin は、信憑的なもの (*πιθανόν*) という言葉自身ストア派の用語であることを指摘し、カルネアデスの信憑的なものの導入も、自らの説のためというより、ストア派の明証的表象 (*κατάληψις*) の解体のためであることを明らかにした。すると実践生活の準則として信憑的なものを受け入れたとする妥協的なカルネアデス像は崩壊する。こうした研究を踏まえて M. Frede は、古典的懐疑主義とドグマ的懐疑主義とを区別する¹⁵⁾。Couissin の分析からも知られるように、アルケシラスやカルネアデスは、自らが或る考えを主張することになるのを注意深く避け、一見自らの説を述べていることも対人論法に過ぎない。このように徹底的に同意の差し控えを貫いた人たちを古典的懐疑主義者と Frede は呼ぶ。これに対して「何もかも知られ得ない」という命題に同意してそれを主張するのはドグマ的懐疑主義者なのである。カルネアデスの臆見や信憑的なものをどう理解するかをめぐる理解の相違のうちに、ドグマ的懐疑主義が生まれてくる過程が覗かれると Frede は考える。フィロやメトロドロスはカルネアデスが自らの説として「知者も臆見する」と述べたと解釈し、臆見を許容し、信憑的なものとしての主張を認めてゆくのである。

明らかにキケロの懐疑主義もこの立場である。probabile が積極的に評価され、probabile とみなすことが懐疑することなのである。アウグスティヌスが眼前にするのもこの懐疑主義である。この懐疑主義は、或る立場を取り、同意することを許している。但し真理として同意するのではなく、信憑的なものとしてである。アウグスティヌスは『信仰の効用について』のなかで懐疑主義者について次のように述べている。「行為においては信憑的なものに従うという人においては、何も信じないというより、何も知り得ないと主張していると見られたがっているのである。というのも自分が肯定するものを

信じない人があろうか。或いはひとが従うものがもし、肯定されるのでなければ、どうして肯定しうるもの *probabile* であろうか。だから真理に逆らう人々の二つの種類がありうる。ひとつは知にだけ反対し、信には反対しない人々であり、他のもう一つは知も信も非難する人々であるが、後者に属する人々が人間の世界に見いだしうるかどうか、私は知らない」(XI, 25)。このようにアウグスティヌスは、懐疑主義と信じるものが対立するものではないと考えている。それは臆見を肯定する懐疑主義を眼前にしていたからである。アウグスティヌスにとって懐疑主義者とは、信に反対する者ではなく、知の可能性に反対する者なのである。だからこそアウグスティヌスの懐疑主義批判は知を持たない知者という考えに向けられていたのである。そしてアウグスティヌスにおいては、*probabile* は同意を避けるためというより、同意を許容するものとして考えられていたように思える。先にキケロと対比させて引用したところのすぐ前でアウグスティヌスは同様の意味のことを次のように表現している。「彼ら（アカデミア派）が真理は見いだされ得ないと自らに説得したように、わたしも自らに真理は見いだされ得ると先ず説得したのでなければ、真理を敢えて探求しないであろうし、擁護すべきなものも持っていないことになる」。ここで自らに説得する *sibi persuadere* と言っていることは *probabile* と同義で置き換え得るのである。ストア派も信憑的表象 (*πιθαναὶ φαντασίαι*) を「魂に滑らかな動きを引き起こすもの」¹⁶⁾ としており、カルネアデスは「われわれを説得し、同意へと導くことを本性とするもの」¹⁷⁾ を主に考えている。そしてこの同意はいわゆるドグマ的懐疑主義においては積極的に考えられ、アウグスティヌスは *probabile* に同意の意味をこめても自分が曲解しているとは感じなかったと推測されよう。

4

アウグスティヌスは *probabile* という概念を中心的に用いてアカデミア派（キケロ）を批判したのであるが、これで彼のアカデミア派に対する態度は尽きたのではない。アカデミア派の主張の真意は別のところにあると

彼は見ている。そしてその真のアカデミア派の意図を暗示しているのも、probabile という概念にあると考える。「カルネアデスはこの世で行為するのに従うべき基準となるものを真に似たもの veri simile と呼んだ。それが何に似ているのか、熟達した彼はよく知っていた。そして賢明にもそれを隠して probable と名付けた。というのも範型を知っている人は、その模像をよくうべないうるのである。というのも知者が、真そのものが何であるかを知らないのに、どうして真に似たものを承認し、それに従うだろうか。だから彼らは真を知っていたのであり、真なる事物の賞賛にあたいする模倣がその内にあると認めた偽りなるものを、彼らは是認したのである」(III. 18, 40)。

アウグスティヌスは明らかに、カルネアデスの probable の主張のうちに、この物的世界を真なる世界の模倣とみる新プラトン主義的な二世界論を見ている。哲学的にみればここにはいくつかの誤りがある。カルネアデスがそうした世界観をもっていたとは考えにくいし、アウグスティヌスも『訂正録 *Retractationes*』(I. 1,4) で次のように述べて、自らの深読みを批判している。「彼らが veri similia と呼んだかの誤りなるものに、彼らが同意したと述べたのは同様に正しくなかった。彼らは何ものにも同意せず、知者は何ものにも同意しないと確言するのである。しかしこの veri simile のそのものを、彼らがまた probable と名付けたために、アカデミア派の人々について私がこのように述べることになったのである」。アカデミア派の probable という概念は、同意や主張を避けるために導入されたものであるのに（アウグスティヌスがこのように誤解したのにはすでに見たような歴史的な理由があったが）、『論駁』のアウグスティヌスは、明らかにカルネアデスが二世界論を密かに主張するために、probabile という概念を用いたと考えている。（この言葉からもカッシアタムのアウグスティヌスは probable に同意の意をこめていたことが知られる。）アウグスティヌス自身、これは自分の推測であると述べている。しかしこのような大胆な推測をするところにアウグスティヌスのこの書の意図がよく読み取れる。アウグスティヌスは自らの立場は probable であり、これは知の立場ではなく、真理に関する無知

ignoratio veri の立場であるとした。そしてアカデミア派も同じところに立っていると考える。それは自らの立つ場の暗がりを自覚したソクラテス的な無知の自覚の継承であり、この点ではアウグスティヌスはアカデミア派を同盟者と見ている。しかしアカデミア派の知者概念の批判に見られるように、アウグスティヌスは、アカデミア派の知への断念のうちに根本的な問題性を見る。独断へのとらわれから自由になろうとするだけである。真理を希求するアウグスティヌスは哲学にはそれ以上のものが必要と考える。無知の暗がりに安住することなく、究極のものとしての真理へ向けて自分を越えていく精神の方向性である。アウグスティヌスにとって、知及び知者とはそのような絶対性の要求をうちに含んでいる。確かに自らがすでにそれを得ているとする態度は、傲慢で不自由な独断をもたらす。だからといって自らの関与を差し控えるならそれで知者たりうるとは認められない。アウグスティヌスにとっての正しい探求の在り方は、まさしく真理は見だし得るのが *probabile* であるとする在り方なのである。ここでは一方で、*probabile* において自己に対する批判的な自覚が保たれ、しかもその中で究極的なものとしての真理への関わりが発見の可能性として保持されるのである。そしてこの構造をアウグスティヌスはしだいに信仰というものの構造として定式化していく。つまり *intelligo me nescire* の自覚をうちに含んだ、究極的なものへの関わりとしての信仰である (*De utilitate credendi*, XI, 25)。さらにアウグスティヌスは *probabile* が *veri simile* と同様であることに深い意味を汲んで、この言葉を導入したカルネアデスは隠された仕方で、究極的なものへの関わりを示唆したと考えているようである。するとアウグスティヌスが自らの立場とする *probabile* としての信仰の立場と、カルネアデスの究極的なものとしての真理への関わりを示唆する *probabile* の立場は、本質的には同じであると、アウグスティヌスは考えていたと思われる。アウグスティヌスが書簡 I で、『論駁』において自分は出来る限り、アカデミア派の人々を真似たというのは、この *probabile=veri simile* にこめられた究極的なものとしての真理への関わりを念頭においてのことと思われる。こうしたアカデミ

ア派に対する思い入れと深読みから後にアウグスティヌスは離れるが、この『論駁』において、アカデミア派との折衝のなかで獲得した「正しい真理探求の在り方」についての洞察は、棄てられることなく、「信仰」というものの根本構造への洞察として深められていくのである。

註

- 1) 岡部由紀子「アウグスティヌス『アカデミア派論駁』——『知』と『不知』」、『中世思想研究』XXIX, p 41-59.
- 2) 神崎繁「〈信なき生〉をめぐって——アウグスティヌスと古代懐疑論」東京都立大学「人文学報」第221号、「生の行為」と〈真理の探求〉——アウグスティヌスにおける懐疑論とその克服の意義——『中世思想研究』XXXIII
- 3) J. Reid はアウグスティヌスが読んだのは『アカデミカ』の第2版であるという (*M. Tulli Ciceronis Academica, the text revised and explained by J. S. Reid, Hildesheim 1966, S. 168*). しかし彼も推測するように第1版の第2巻は第2版の第4巻に内容的に概ね移されていると考えて良いであろうから、このテキストをアウグスティヌスが読んだ蓋然性は高い。
- 4) M. Testard によれば、アウグスティヌスが懐疑主義を真剣に問題とする機縁となったのはアンブロシウスの説教を聞いたことであるという。アウグスティヌスにとって懐疑は探求と深く結びついているのである。cf. M. Testard, *Saint Augustin et Ciceron*, Paris 1958, p. 81-129.
- 5) W. Thimme は、アウグスティヌスの *probabile* の主張のうちにアウグスティヌスの内心の揺れを見ようとする。しかしこれは当たっていない。cf. W. Thimme, *Augustins Geistige Entwicklung*, Berlin 1908, S. 78.
- 6) P. Couissin, *The Stoicism of the New Academy*, in *The sceptical tradition* (translated by Barnes and Burnyeat). Berkley, 1983, p. 31-63.
G. Striker, *Sceptical Strategies*, in *Doubt and Dogmatism*, Oxford 1980, p. 54-83.
M. F. Burnyeat, *Carneades Was No Probalist*, in *Riverside Studies in Ancient Scepticism* (forthcomimg).
- 7) M. F. Burnyeat, *Can the Sceptic Live His Scepticism?* in *The Sceptical Tradition* p. 117-148
- 8) Sextus Empiricus, *Outlines of Pyrrhonism*, I, 30.
- 9) W. Thimme, *Augustins Geistige Entwicklung*, Berlin 1908, S. 77 f.
- 10) Ch. Kirwan, *Augustine*, Routledge 1989, p. 15-34.

- 11) Th. Bucher, Augustinus und der Skeptizismus zur Widerlegung in *Contra Academicos*, in *Augustinianum* 25, vol. II, S. 381-392.
- 12) R. Hirzel, *Untersuchungen zu Cicero's philosophischen Schriften* iii, Hildesheim 1964, p.162-80.
- 13) V. Brochard, *Les Sceptiques grecs*, Paris 1969, p. 135.
- 14) P. Couissin, *op. cit.* p. 34.
- 15) M. Frede, The Sceptic's Two Kinds of Assent, in *Essays in Ancient Philosophy*, p. 201-222.
- 16) Sextus Empiricus, *Adversus Mathematicos*, VII, 242.
- 17) Sextus Empiricus, *ibid.* VII, 172.